

第IV章 まとめ

第1節 北中遺跡における古墳時代集落の変遷

今次の調査では、狭い調査区ながら多くの遺構が検出された（第71図）。検出された遺構の多くはこれまでの調査同様、古墳時代に位置付けられるものである。本節では、まず今次調査で確認された古墳時代建物の変遷を示す。そして、1次から3次調査における建物の変遷とあわせて、現状における北中遺跡の古墳時代集落の変遷を確認する。

主に出土遺物と切り合い関係、加えて建物の配置や軸方向を加味すると、今次調査で確認された竪穴建物、掘立柱建物の変遷は第18表のように考えられる。今次調査では古墳時代中期後葉から古墳時代終末期初頭にかけての遺構が確認されており、古墳時代後期の遺構がもっとも多い。後期の各小期ではいずれも掘立柱建物と竪穴建物が存在する。掘立柱建物は、TK10型式期以降、すべて総柱建物であり注目できる。また、竪穴建物規模は、時期によらず大型、小型のものが並存している状況である。

以上、今次調査で検出された古墳時代建物変遷の概略を示した。これに1から3次調査の調査成果をあわせて現状での古墳時代北中遺跡集落の変遷を確認しておきたい。

北中遺跡において古墳時代集落が形成されるのは、古墳時代中期中葉（TK216型式期）である。その後、中期後葉までは各調査区で竪穴建物が散見される程度である。中期末葉から後期初頭（TK47-MT15型式期）になると、竪穴建物の数が増加し、大型のものも見られるようになる。掘立柱建物もこの時期から存在する。2次、4次調査区に建物は集中し、1次調査区には存在しない。後期中頃（TK10-MT85型式期）も前段階と同様の状況で多くの建物が存在する。掘立柱建物はこの時期に総柱化する。後期中頃から末（TK43-TK209型式期）には建物の数は減少するものの、3次、4次調査区では前段階とほぼ同様の状況である。2次調査区は地下式横穴墓が構築され墓域化している。終末期初頭（TK217型式期）以降は建物は激減し、僅かに散見されるのみになる。4次調査区掘立柱建物16はこの時期に位置付けられるもので、総柱建物ではあるが規模が縮小している。古代以降も竪穴建物が散見されるが、ごく僅かに確認できる程度となる。ちなみに火処は集落形成時から地床炉が認められ、埋甕はTK10型式期以降、竈は僅かに遅れてMT85型式期以降確認できる。それ以降は3者が古代まで並存する状況である。

以上のように、これまでの調査成果から判断すれば、古墳時代北中遺跡の集落は古墳時代中期中葉から古代まで続く集落であるといえる。その最盛期は後期初頭から中頃で、この段階には大型の竪穴建物や総柱掘立柱建物が立ち並ぶ状況であった。後期中頃から末には一部が墓域化し、建物の数はやや減少する。終末期以降は急速に衰退しながらも、古代まで細々と集落は存続していく。

第2節 北中遺跡における古墳時代の鍛冶について

北中遺跡では、これまでの4次にわたる調査で、古墳時代の遺構から一定量の鉄滓やフイゴ羽口が出土した。しかし、本遺跡における具体的な鍛冶の様相についてはあまり言及されてこなかった。本節では、これまで本遺跡において確認された鍛冶関連遺構や遺物を概観し、古墳時代北中遺跡の鍛冶について現段階での見通しを示しておきたい。

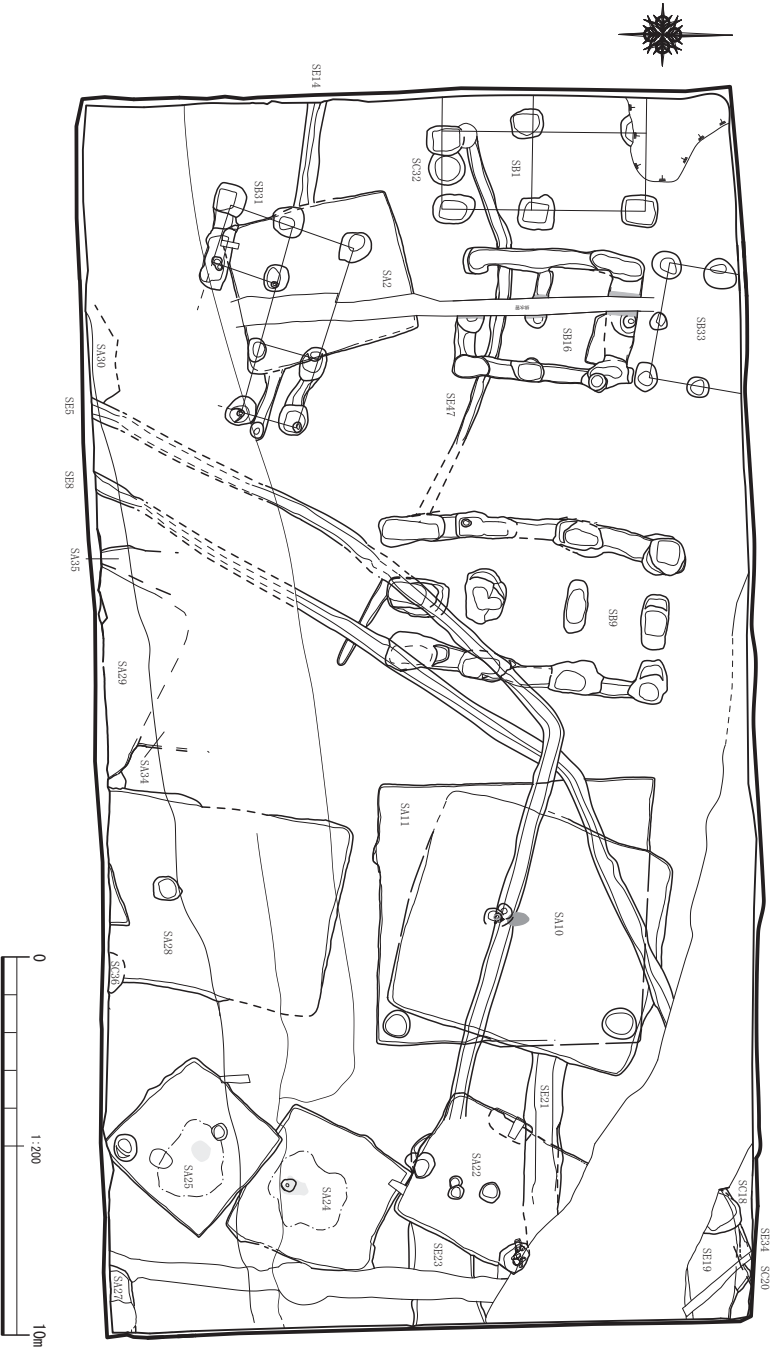
北中遺跡における鍛冶関連遺物には、鉄滓、フイゴ羽口、素材の可能性がある不明棒状鉄製品があり、鉄滓には椀形滓と判断できるものが一定量存在しているほか、金属加工具とみられる石器も認められる。これら鍛冶関連遺物はほとんど竪穴建物からの出土である。合計13軒から出土して

第 18 表 北中遺跡 4 次調査区建物変遷表

時期	古墳時代中期	古墳時代後期				古墳時代終末期
	TK23 ～ 47	MT15	TK10	MT85	TK43 ～ TK209	TK217
遺構	SA22	SA24 SA28 (SB33)	SA25 SA29 (SB1)	SA2 SA11 SB9	SA10 SA27 SB31	SB16

※（ ）は軸方向からの推定による時期比定。他は出土遺物から。

第 71 図 北中遺跡 4 次調査区古墳時代主要遺構配置図 (S=1/200)



おり（註1）、時期的には5世紀末に位置付けられるもの3軒、6世紀に位置付けられるもの8軒、7世紀に位置付けられるもの1軒、8世紀に位置付けられるもの1軒である。そのほか、2次調査の1号Pitから鉄滓、フイゴ羽口が廃棄された状況で確認され、4次調査掘立柱建物1、9の柱掘方からも僅かに鉄滓が出土している。いずれも6世紀代の遺構である。

このような鍛冶関連遺物の出土状況に対して、鍛冶関連遺構については明確なものは確認されていない。しかし、1次調査竪穴状遺構2では床面から鉄滓が多く出土していること、2次調査のSA3では椀形滓、フイゴ羽口が出土し、床面には炭化物が広がっていたことなどから、当該遺構では鍛冶がおこなわれていた可能性が考慮される。また、鉄滓が出土した竪穴建物からは台石が出土する傾向も看取できる。

以上、これまでに北中遺跡において確認された鍛冶関連の遺物について示した。情報はきわめて限られた現状であるが、ここから現段階で考えうる古墳時代北中遺跡における鍛冶について検討してみたい。

まず、鍛冶のおこなわれた時期については、その開始が5世紀末まで遡るとみられる。また、集落の最盛期と同じ6世紀代に鍛冶関連の遺物も集中する。その後8世紀まで僅かだが鍛冶関連遺物が確認されるため、本遺跡では5世紀末以降継続的に鍛冶がおこなわれたことがわかる。鍛冶炉など明確な鍛冶関連遺構が未確認のため、炉や工房の形態は不明だが、上述の1次調査竪穴状遺構2などの状況や鍛冶関連遺物のほとんどが竪穴建物より出土する状況から、竪穴建物内での鍛冶がおこなわれていた可能性が高いと考えられる。しかし、鍛造剥片などの遺物は確認されていない。製鉄から鍛錬鍛冶にいたるどの段階の作業がおこなわれたかについては不明だが、椀形滓の存在から何らかの炉が存在したことは間違いない。また、素材の可能性のある不明棒状鉄製品も出土しており、少なくとも鍛錬鍛冶はおこなわれていたと推定される。近隣に所在し、時期もほぼ同じくする山崎上ノ原第1、2遺跡では、鉄滓の分析から砂鉄を原料とする製鉄から鍛錬鍛冶にいたる一連の工程がおこなわれていたことが明らかになっており、本遺跡でもそうした鍛冶がおこなわれていた可能性は十分ある。

第3節 宮崎市海岸部の古墳時代集落と北中遺跡

北中遺跡の所在する宮崎市街地周辺は、第I章で記述したとおり、沖積地、砂丘からなる微高地と旧河道からなる低地が入り組んだ複雑な地形を呈していたと考えられる。遺跡は、このうち微高地上に展開しており、特に沖積微高地縁辺部や砂丘上に多く認められる。

北中遺跡周辺の沖積微高地や砂丘上では、弥生時代前期から遺跡が認められる。しかし、弥生時代後期以降遺跡が激減し、前方後円墳の櫓1号墳を除くと古墳時代中期初頭まではほぼ空白ともいえる状況となる。

この地域で再び集落が形成されるのは、古墳時代中期中葉以降であり、主要な遺跡に北中遺跡、大町遺跡、浄土江遺跡がある。いずれも市街地周辺の沖積微高地上に位置する遺跡であり、多くの竪穴建物が確認されている。

古墳時代中期中葉には、北中遺跡で竪穴建物が確認されており（註2）、沖積微高地上において集落が形成され始める。後期初頭から後期中頃にかけて、北中遺跡では竪穴建物が増加し、集落の最盛期を迎える。後期前半には大町遺跡、浄土江遺跡において竪穴建物が確認されており、集落の形成が開始される。後期後半になると北中遺跡では竪穴建物がやや減少するが、それに入れ替わるように大町遺跡で集落の最盛期を迎える。大町遺跡で確認された竪穴建物はそのほとんどが当該時

期から終末期初頭までのものである。終末期後半になると、北中遺跡、大町遺跡では竪穴建物の数が激減するが、浄土江遺跡では集落形成の最盛期を向かえ古代へと続いていく。

各遺跡とも集落全体を調査していないため、各遺跡周辺に現在確認されている時期以外の遺構が広がっている可能性も依然残されているが、以上のような現状を単純に評価すれば、古墳時代中期中葉以降の宮崎市街地周辺の沖積微高地では、時期ごとに中心的な位置を占める集落の位置が移動していると考えられる。その中において北中遺跡は、沖積微高地での集落形成の端緒となった遺跡であると位置付けることが可能であろう。また、今次調査区で確認された総柱の掘立柱建物群を中心として多くの竪穴建物が展開する状況から周辺の拠点集落的な位置を占めていたものとも考えられる。

今次調査で出土した宮崎平野部初となる有孔円板や、第2次調査6号地下式横穴墓出土のトンボ玉、今次調査竪穴建物24、土坑18から出土した把手付鉢の存在から、北中遺跡での集落形成の背景には、ここに居住する人々の広域にわたる交流を想定することができる。こうした広域交流を背景として、鉄器生産に代表される新技術を保持した集団によって北中遺跡の古墳時代集落は形成されたものと考えたい。宮崎平野部では、宮崎市山崎上ノ原第1、2遺跡、宮ヶ迫遺跡、新富町上藺遺跡、西都市宮ノ東遺跡など北中遺跡と同様の状況を呈する集落遺跡が各地で確認されているが、これらの集落の形成には、和田理啓が想定する（宮崎県埋蔵文化財センター2013）ような計画村落的な性格を含めた検討が必要であろう。

【註】

註1 金属加工具とみられる石器については、必ずしも用途が明確でないため、その出土遺構はここに加えていない。

註2 北中遺跡1次調査竪穴建物1は古墳時代前期末～中期初頭と報告されているが、出土土器を見ると中期中葉以降に位置付けられるものと考えられる。

【主要参考文献】

宮崎県埋蔵文化財センター編 2013『山崎上ノ原第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第224集 宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎市教育委員会編 1981『浄土江遺跡』宮崎市文化財調査報告書第6集 宮崎市教育委員会

宮崎市教育委員会編 1993『浄土江遺跡Ⅱ』宮崎市文化財調査報告書第25集 宮崎市教育委員会

宮崎市教育委員会編 1998『大町遺跡』宮崎市文化財調査報告書第33集 宮崎市教育委員会

宮崎市教育委員会編 1999『北中遺跡』宮崎市文化財調査報告書第38集 宮崎市教育委員会

宮崎市教育委員会編 2002『北中遺跡Ⅱ』宮崎市文化財調査報告書第51集 宮崎市教育委員会

宮崎市教育委員会編 2003『北中遺跡Ⅲ』宮崎市文化財調査報告書第56集 宮崎市教育委員会